

TOEIC IP による千葉大生の英語力の現状分析

土肥 充

1. はじめに

国内外における学術・文化交流、ビジネス、インターネットなどのさまざまな場面で英語の重要性が増す中で、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」(文部科学省, 2002)が発表されるなど、政府も本格的に英語重視の政策を進めようとしている。大学教育においても英語が重視されることは例外でなく、2004年度からの国立大学法人化の動きの中で英語教育にも数値目標が求められる例が増えた。千葉大学においても中期計画に以下のように明記され公表されている。

外国語教育の成果を検証するため、国際教育開発センターは、外部試験 (TOEFL、TOEIC、TOEIC - IP 等) の全学的基準を設定する。各学部はこれを活用し、学習到達目標の達成に努める。
(国立大学法人千葉大学, 2004/6/3)

さらに、年度計画においては具体的な数値が明記され、結果も公表されることとなった。年度によって計画の内容は若干異なるが、たとえば2005年度の年度計画においては、以下のように記されている。

国際教育開発センターは、外国語教育の成果の指標として、1年次終了時点の目標をTOEIC 500点に設定するとともに、学内実施のTOEIC受験者数500人を目標とする。また、学部ごとに、学内TOEICの受験者数及び達成度(得点)を調査する。
(国立大学法人千葉大学, 2005/2/1)

ここで言う「目標」とは最終的な到達目標ではなく、本来はすべての学生がクリアすべきと大学が考える「最低基準」である。しかし実際には多様な入試を受けて入学した学生全員が500点を超えることは困難であり、またそれ以前の問題として、大学が受験費用を負担しない限り、すべての学生が自主的にTOEICやTOEIC IPを受験することは期待できない。そこで当面は少しでも多くの学生がTOEIC IPの受験をすることを推奨し、その平均点が500点を超えることが現実的な目標として設定されている。英語学習の成果に関して学部別のTOEIC IP受験者数と得点を数値目標として設定することには異論も出されているが、すでに中期計画は2004年度から実施されており、説明責任が求められることが多い最近の大学では避けられない動きである。また、TOEIC IPの実施は大学の成果を公表することだけが目的でなく、各学生が自らの英語力を客観的に把握し、それぞれが今後の学習目標を設定することに重要な意義がある。TOEICの得点については全

(16)

国のさまざまな受験者群（大学や短大の種別、専攻別、企業の職種別、役職別など）の平均点が公表され、「スコアの表す能力」が明記されていることから、入試や授業のために学内で作成するテストとは異なった汎用性の高いスコア解釈が可能であり、英語教育の「指標のひとつ」として使用することは妥当であると考え（TOEIC 運営委員会，2005）。

従来千葉大学における外国語教育の司令塔の役目を果たしてきた外国語センターが2004年度に留学生センターと合併することにより国際教育開発センター（以下、他のセンターとの区別がしにくい場合を除き「センター」）が発足し、外国語教育と国際交流の関連がより明確に関連付けられるようになってきた。このような動きの中で、千葉大学におけるこれまでの TOEIC IP の実施結果を中心に、大学が公的に発表する内容（学部別 TOEIC IP 受験者数と平均得点）以上に詳細なデータを調査分析し、今後の外国語教育や国際交流の改善に少しでも結び付けることが重要であると考え、本論文を執筆することにした。なお、本論文の多くの部分は筆者が大学およびセンターにおける英語教務担当者（2004～2005年度）、TOEIC IP 担当者（2003年度以降）として収集したデータが中心であるので個人名での執筆としたが、筆者以外の方々かなりの程度関わったデータについてはその旨を明記した。

2. 研究の目的

千葉大学において全学的な英語力調査がされていないのが実情であるが、本論文ではたとえ限定的ではあっても TOEIC IP 等のデータを分析することにより、千葉大生の英語力を調査し、現状の一端を示すことを目的とした。

3. 調査の方法

それぞれの調査は以下の方法によって実施し、結果は後述の「結果」の欄にまとめて示した。

1) 2003, 2004 年度 TOEIC IP

千葉大学において従来から外部試験（実用英語技能検定、TOEFL、TOEIC）の級および得点に応じた単位認定が実施されているが、学生が高い受験料を負担して学外に受験に行かなければならなかった。受験料が比較的安い団体受験制度による TOEIC IP も、過去に一部の教員が担当するクラスだけで実施したケースはあったが、2003年度から外国語センターが全学を対象に実施することとし、「学内検定英語」の単位認定も同時に開始した。TOEIC IP の開始にあたっては TOEFL ITP の実施も求める意見もあったが、一般的な大学生の興味、必要性、進路等を考慮して、当面は TOEIC IP のみを全学対象に実施することにした。表1に2003年度実施の概要を示した。

表1 2003年度 TOEIC IP 実施の概要

<p>試験日：4回（2003年5月17日（土）9:45～12:45, 8月2日（土）9:45～12:45, 12月13日（土）9:45～12:45, 2004年2月7日（土）9:45～12:45）</p> <p>会場：西千葉キャンパス総合校舎H号館3階LL1およびLL2教室</p> <p>申込受付, 受験料の徴収, 試験監督：千葉大生協ブックセンター</p> <p>受験料の負担：受験者本人</p> <p>立会い：外国語センター英語教員</p>

外国語センターが国際教育開発センターに改組された2004, 2005年度は、受験者数の増加に対応するために年間の実施回数を5回に増やし、総合校舎B号館（約200名収容）に会場を移動し、さらに2005年度第4回（12月）からは総合校舎B号館とC号館（約100名収容）を同時使用することにした。また、回によっては午後も実施している。千葉大学の学生と教職員であれば受験料を支払うことによりだれでも受験が可能で、英語授業や各学部の入学ガイダンスにおいて受験を推奨することを英語教員や学部教員に依頼した。また、2004年度からは医学部および先進科学プログラム、2005年度からは薬学部の1年次学生の受験が義務付けられた。

TOEIC IPの結果は、2003, 2004年度の2年分については学部別に集計し、それぞれ翌年度にセンターの学部英語教育専門委員会および千葉大学普遍教育委員会において学部名を明記した形で各学部代表者に報告した。学部名と2004年度の平均点はすでに学外にも公表されている（国立大学法人千葉大学, 2005）が、2003年度と2004年度を合わせた形でより詳細な分析をすることにした。このような資料を学外に公表することについては慎重を要すると考え、本論文では学部名をA学部、B学部等の名称で表記した。TOEIC IP受験の際に付随して実施されるアンケートおよび千葉大学独自に受験者に実施したアンケートの結果についても集計した。

2) 検定英語と学内検定英語による単位認定者数の集計

千葉大学において単位認定の対象となる英語の外部試験は、実用英語技能検定、TOEFL、TOEICで、学生が自主的に学外で受験したものに加え、文学部と教育学部がそれぞれ学部内で実施したTOEFL ITP（団体受験制度）とセンターが全学を対象に実施したTOEIC IP（団体受験制度）を含む。単位認定の手続きについては、2004年度は学生からの申請に基づきセンターで英語教務担当者（筆者）が予備的な審査をした後、各学部で単位認定を行った。2005年度からは事務手続きの簡略化のため、センターでの審査を省略することになった。2004年度分の認定の記録は留学生課国際教育開発センター係が保管しており、その資料を活用して科目の名称、必要となる級または得点、単位数等の情報とともに筆者が分類して認定者数を集計した。

3) TOEIC IP 複数回受験者の得点上昇量の集計

受験者の多くは2003, 2004年度に1回だけTOEIC IPを受験したが、複数回(2～6回)受験した学生もいる。その得点の上昇量を算出することにより、千葉大学在学中の英語学習の成果の一端を知ることができる。本研究では便宜上3回以上受験した学生の途中の経過は考慮せず、初回から最終回への得点の上昇量の平均を算出した。たとえば、4回受験した学生の2回目と3回目のデータは上昇量の集計からは除外し、1回目と4回目の得点を使用した。また、初回と最終回の間隔(日数)も平均を算出した。

4. 結果

前述の「調査の方法」の順にしたがって、以下に調査結果をまとめた(集計データはいずれも丸めの誤差を含む)。

1) 2003, 2004年度 TOEIC IP 結果

2年間(9回)の試験日別受験者数を表2に、2年間の受験者(のべ1240名)の平均点、最高点、最低点をTotal, Listening Section, Reading Sectionに分けて表3に示した。いずれも学部生と大学院生を含むが、白紙提出者、研究生、科目等履修生、および教職員は除いた。また、のべ1240名の受験者のうち、のべ391名分は175名の学生が複数回(2～6回)受験したものである。なお、表3の「最高点」の欄においてListeningとReadingの点数を合わせてもTotalの点数にならないのは、Listeningの最高点を取った受験者とReadingの最高点を取った受験者が異なるからであり、「最低点」についても同様である。

表2 2003, 2004年度試験日別受験者数

試験日	人数
2003/5/17	83
2003/8/2	88
2003/12/13	161
2004/2/7	82
2004/5/15	312
2004/7/31	148
2004/10/23	141
2004/12/11	144
2005/2/5	81
計	1240

表3 Section別平均点、最高点、最低点

平均点	Total	528.7
	Listening	278.2
	Reading	250.4
最高点	Total	935
	Listening	495
	Reading	450
最低点	Total	215
	Listening	10
	Reading	55

全受験者の得点分布を表4に示した。

表4 Totalスコア分布 (全学部・院)

以上	未満	人数	%	%	0	5	10	15 (%)	
200	250	3	0.2	41.9					
250	300	12	1.0						
300	350	41	3.3						
350	400	82	6.6						
400	450	164	13.2						
450	500	218	17.6						
500	550	198	16.0	58.1					
550	600	188	15.2						
600	650	161	13.0						
650	700	88	7.1						
700	750	41	3.3						
750	800	33	2.7						
800	850	4	0.3						
850	900	3	0.2						
900	950	4	0.3						
計		1240	100						100

学部別の平均点を表5に示した(大学院は学部とは別枠で示した)。

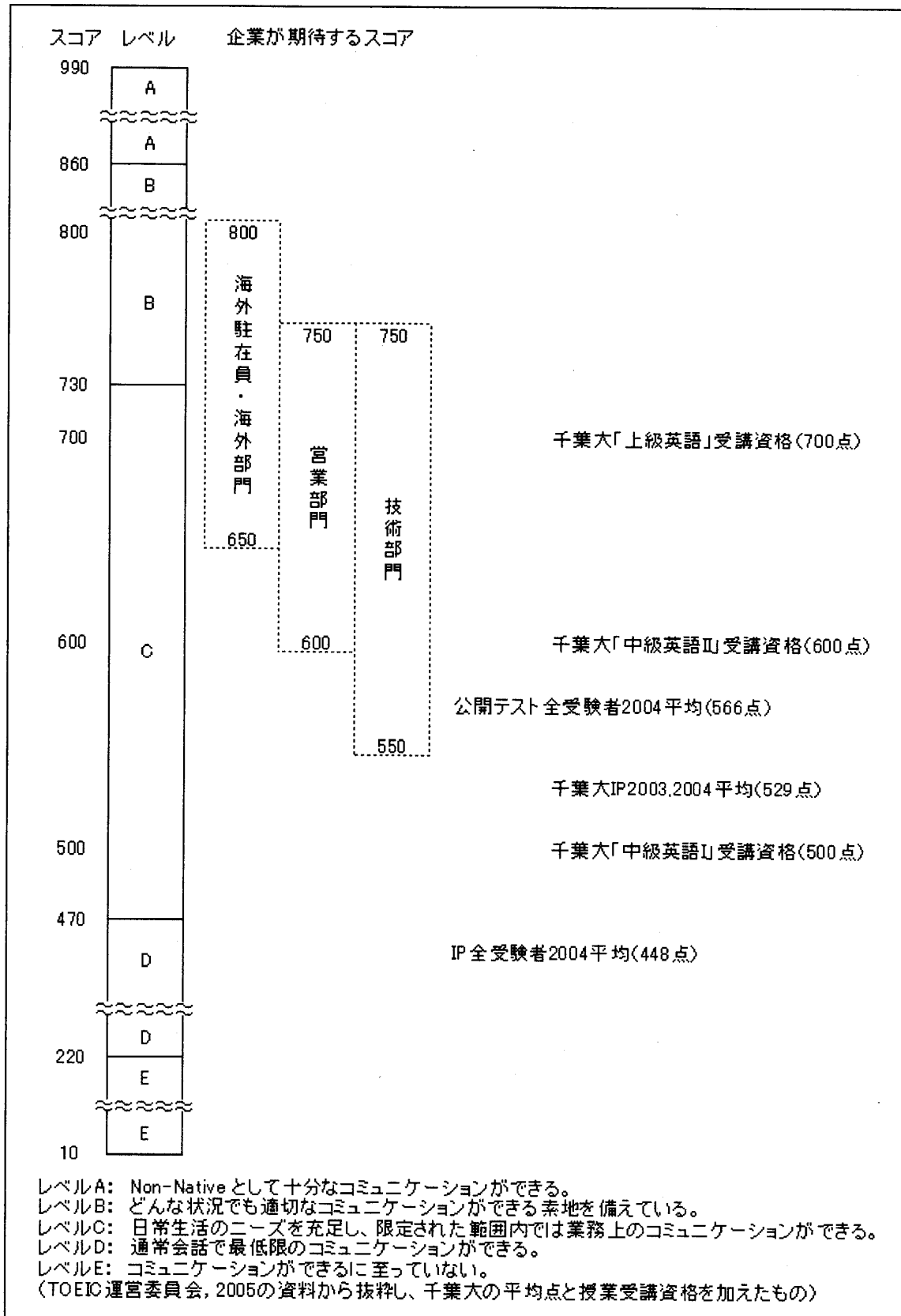
表5 学部別平均点

学部名	人数	Total	Listening	Reading
A	137	626.3	307.8	318.5
B	64	544.2	266.7	277.5
C	73	535.2	279.0	256.2
D	114	533.3	283.8	249.5
E	227	527.0	276.1	250.9
F	322	507.7	269.8	237.9
G	78	505.9	279.9	226.0
H	65	500.0	277.2	222.8
I	97	490.3	273.5	216.8
大学院	63	514.8	271.4	243.3
全学部・院	1240	528.7	278.2	250.4

TOEIC Proficiency Scale に千葉大生の平均点および千葉大学における「中級英語 I」「中級英語 II」「上級英語」の受講資格を加えたものを図1に示した。

(20)

図1 TOEIC Proficiency Scale に千葉大学の位置付けを加えたもの



TOEIC IP 受験の際に付随して実施されるアンケート（表 10～14）および千葉大学独自に受験者に実施したアンケート（表 6～9）の結果については以下に示した。各設問への回答については、それぞれもっとも当てはまる選択肢を 1 つのみ選ばせた。

表 6 英語学習の目的

選択肢	人数	%
単位取得のため	86	6.9
教養のため	499	40.2
学術研究のため	108	8.7
就職に有利だから	137	11.0
留学のため	49	4.0
海外旅行	23	1.9
外国人とのコミュニケーション	207	16.7
わからない	33	2.7
無回答	98	7.9

表 7 TOEIC IP 受験の動機

選択肢	人数	%
単位取得のため	367	29.6
就職活動のため	99	8.0
現在の英語力を客観的に知るため	406	32.7
英語学習の目標を設定するため	141	11.4
以前のスコアと比較して伸び具合を知るため	62	5.0
受験を薦められたから	43	3.5
その他	25	2.0
無回答	97	7.8

表 8 スコアがよければ単位申請するか

選択肢	人数	%
するつもり	857	69.1
未定	137	11.0
しないつもり	113	9.1
単位を申請する資格がない	35	2.8
無回答	98	7.9

(22)

表9 TOEIC IP をまた受験してみたいか

選択肢	人数	%
そう思わない	127	10.2
あまり思わない	46	3.7
どちらでもない	78	6.3
少し思う	156	12.6
そう思う	619	49.9
わからない	108	8.7
無回答	106	8.5

表10 現在、日常生活において英文を書いたり読んだり、あるいは英語で意思疎通をはかる必要があるかどうか

選択肢	人数	%
YES	318	25.6
NO	838	67.6
無回答	84	6.8

表11 主として英語を話す生活を送りながら海外に通算6ヶ月以上滞在したことがあるかどうか

選択肢	人数	%
YES	59	4.8
NO	1087	87.7
無回答	94	7.6

表12 主として英語を話す生活を送りながら海外に6ヶ月以上滞在したのはいつか

選択肢	人数
今から1年以内	18
今から1年～3年以内	9
今から3年～5年以内	5
今から5年～10年以内	9
今から10年以上前	22

(表12の人数を合計しても表11の「Yes」の回答者数と合わないのは、表11で「No」と回答したか「無回答」であったにもかかわらず表12の設問で回答した受験者がいたためである)

表 13 過去の TOEIC 受験回数

選択肢	人数	%
はじめて	726	58.5
これまでに 1 回	234	18.9
これまでに 2 回	111	9.0
これまでに 3 回以上	83	6.7
無回答	86	6.9

表 14 過去 1 年以内に取得した英検の級

選択肢	人数	%
1 級	0	0.0
準 1 級	7	0.6
2 級	130	10.5
準 2 級	94	7.6
3 級	124	10.0
4 級	11	0.9
5 級	3	0.2
無回答	871	70.2

2) 検定英語と学内検定英語による単位認定者数の集計結果

2003, 2004 年度の TOEIC IP 受験者 1240 名のうち、学部生は 1177 名であった。学部生受験者のうち、実際に単位認定を希望するかどうかにかかわらず、単位認定に相当するスコアを取得した学生数を表 15 に示した。

表 15 単位認定に相当するスコアを取得した学部生受験者数 (2003, 2004 年度)

得点	認定科目	単位数	人数
L300 以上 340 未満	学内検定英語 LI	1	245
L340 以上 365 未満	学内検定英語 LI, LII	2	75
L365 以上	学内検定英語 LI, LII, LIII	3	111
R300 以上 340 未満	学内検定英語 RI	1	160
R340 以上 365 未満	学内検定英語 RI, RII	2	70
R365 以上	学内検定英語 RI, RII, RIII	3	50

TOEIC IP による単位認定も含め、2004 年度 1 年間の外部試験による「検定英語」と「学内検定英語」の単位認定者数を表 16 に示した。

表 16 2004 年度検定英語と学内検定英語による単位認定者数の集計
(留学生課国際教育開発センター系の記録を筆者が分類して集計したもの)

試験の名称	級/点数	認定科目名	認定 単位	人数	単位 × 人数	試験別 人数
実用英語技能検定	準 1 級	検定英語 I	2	3	6	3
	1 級	検定英語 I,II,III	6	0	0	
TOEFL CBT	173 以上 197 未満	検定英語 I	2	5	10	21
	197 以上 213 未満	検定英語 I,II	4	4	16	
	213 以上	検定英語 I,II,III	6	12	72	
TOEFL PBT	500 以上 530 未満	検定英語 I	2	3	6	5
	530 以上 550 未満	検定英語 I,II	4	2	8	
	550 以上	検定英語 I,II,III	6	0	0	
TOEFL ITP (学内)	500 以上 530 未満	学内検定英語 I	2	3	6	7
	530 以上 550 未満	学内検定英語 I,II	4	3	12	
	550 以上	学内検定英語 I,II,III	6	1	6	
TOEIC	600 以上 680 未満	検定英語 I	2	96	192	187
	680 以上 730 未満	検定英語 I,II	4	39	156	
	730 以上	検定英語 I,II,III	6	52	312	
TOEIC IP (学内) Listening Section	300 以上 340 未満	学内検定英語 LI	1	66	66	132
	340 以上 365 未満	学内検定英語 LI,LII	2	24	48	
	365 以上	学内検定英語 LI,LII,LIII	3	42	126	
TOEIC IP (学内) Reading Section	300 以上 340 未満	学内検定英語 RI	1	47	47	104
	340 以上 365 未満	学内検定英語 RI,RII	2	27	54	
	365 以上	学内検定英語 RI,RII,RIII	3	30	90	
計				459	1233	459

注：(学内)は団体受験制度によって学内で実施した試験を示す。TOEIC IP は外国語センター (2003 年度) および国際教育開発センター (2004 年度) が全学を対象に実施し、TOEFL ITP は文学部と教育学部がそれぞれ学部内で実施した。

3) TOEIC IP 複数回受験者の得点上昇量の集計結果

2003, 2004 年度に TOEIC IP を受験したのべ 1240 名のうち、のべ 391 名分は 175 名の学生が複数回 (2 ~ 6 回) 受験したものである。その回数別内訳を表 17 に示した。

表 17 複数回受験者の受験回数別得点上昇量

受験	人数	間隔 (日)	上昇 (点)
2 回	141	166.9	19.7
3 回	30	289.1	41.5
4 回	2	259.0	52.5
5 回	1	420.0	125.0
6 回	1	553.0	- 105.0
計	175	192.5	23.7

(3 回以上受験者は初回と最終回の差)

同じ 175 名のデータを使用し、複数回受験者の得点上昇量を入学年度別に集計して表 18 に示した。

表 18 複数回受験者の入学年度別得点上昇量

入学年度	人数	間隔 (日)	上昇 (点)	備考
2004	48	162.2	31.4	1 年次 (2004) に複数回受験
2003	59	213.3	22.6	1,2 年次 (2003,2004) に複数回受験
2002	32	245.7	20.6	2,3 年次 (2003,2004) に複数回受験
2001 以前	36	151.7	18.1	3 年次以降 (2003,2004) に複数回受験
計	175	192.5	23.7	

さらに複数回受験者の得点上昇量を、初回の得点の分布別に集計して表 19 に示した。

表 19 複数回受験者の初回得点別上昇量

初回点数	人数	間隔 (日)	上昇 (点)
200 点台	1	133.0	315.0
300 点台	12	138.3	49.6
400 点台	62	200.6	48.1
500 点台	65	188.5	21.8
600 点台	33	205.8	- 34.8
700 点台	2	210.0	- 2.5
計	175	192.5	23.7

5. 考察

本論文に示した 2003, 2004 年度の TOEIC IP 等のデータは千葉大学の英語教育の現状について知るための貴重な資料となるが、まだ不十分な点も多い。まず表 2 に示した受験者数はのべ 1240 名であるが、表 17 に示した通り複数回受験した学生が 175 名 (のべ 391 名) おり、大学院生を含めて 1 万人を超える千葉大生の中で約 1 割 (千名程度) のデータに過ぎない。無作為に抽出した 1 割ではなく、自主的に受験料を払って土曜日の貴重な時間を割いて受験したという意味でやる気のある学生のデータであると言える。常識的に考えると、仮に全学生が受験した場合に平均点は大きく下がると予想できる。しかしその予想を覆す事実も一部にはある。今回の集計対象外となる 2005 年度のデータも関係するので本論文には平均点を示さなかったが、2004, 2005 年度にそれぞれ新入生への受験を義務付けた医学部と薬学部の義務化前と義務化後の平均点を比較すると、義務化後のほうがいずれも高い平均点となった。このことが他の 7 学部にも当てはまるかどうかは不明であるが、当初思っていたほど受験者と未受験者の差は大きくないのかもしれない。本来であればこのようなことも考慮しなければならないはずであるし、英語学習には他にもさまざまな要因 (学習方法、学習時間、動機付け、教員等) が影響するが、それらの要因をすべて厳密に統制した比較は不可能である。しかし千名以上のデータが集まったことによってある程度の傾向は見えてきた。統計的な比較をするときには有意差の有無を検定するのが一般的であるが、本研究では細かいデータのひとつひとつを取り上げて厳密に有意差の有無を判定することが目的ではなく、今の段階では中間報告として何らかの傾向がないかを総合的に観察することを考え、あえて統計的検定をしなかった。将来的により包括的な資料がそろった段階で統計的検定をする予定である。このように考えた根拠のひとつには 1 年近く前に 2003 年度と 2004 年度前半の 1 年半の受験者データで複数回受験者の得点上昇を調べた際、明確な上昇が結論づけられなかったのに対し、今回の集計では受験者数が大幅に増えた影響もあって比較的はっきりした傾向が見られたという事実がある。データが増えれば増えるほど信頼性の高い結論が導けるのが一般的であり、今回の 2 年分のデータだけで最終的な「結論」を断定することは早計であるかもしれないと考えている。それでも最終結論が出せるまで待っているのは今後の改善に結びつけることができないので、今回は受験者のデータが千葉大の実態を比較的正確に表しているとの前提で、推計も含めて以下に筆者の考えを述べる。

本論文の最初に示した TOEIC IP についての中期計画と 2004 年度計画については、表 2～5 に示した通り受験者数 (1240 名のうち、2004 年度が 826 名) と得点 (全体平均が 529 点で、受験者の 58.1% が 500 点以上あり、学部別平均はほとんどの学部が 500 点以上ある) の両面でほぼ達成できたと言える。しかし表 4, 5 から、学生によるばらつきのみならず、学部による平均点の差も大きいことがわかる。入試の多様化も影響していると考えられるが、大学における英語教育も多様な学生や学部への対応を迫られている。平均点で考えると図 1 に示したように千葉大学の IP 平均点は IP 全受験者の平均を大きく

上回っているが、海外での活躍が期待できる水準に達している学生が少ないこともわかる。図1には留学に必要な英語力が示されていないが、筆者は概ねレベルB以上であると考えている。図1には習熟度別クラス編成のために2006年度から開講する中上級3レベルのクラスの受講資格も示したが、これらの授業等も活用してさらに上を目指す学生が増えることを期待している。

表6～14のアンケート結果についても多くのことが言えるが、たとえば英語学習の目的を単位取得とする学生が少ない(6.9%)のに対し、TOEIC IP受験の目的を単位取得とする受験者が約3割おり、スコアがよければ単位申請したい学生が約7割いることがわかる。表15(2年分)と表16(1年分)の単位認定に関連するデータは対象となる期間が異なるので単純に比較できないが、2004年度の1年間だけで459名もの学生がTOEIC, TOEFL等の外部試験で単位を取得している。この459名の取得単位数は表16の下部に示したように、のべ1233単位で、半期15回週1回で1単位の授業の履修者数を仮に30名とすると、41クラス分に相当する。千葉大学のコマ数削減の方針には合致するが、以前から学内で指摘されていたように、外部試験で単位を取った分だけ学生の英語履修者数が減り、英語力の向上にはマイナスとなっている可能性が指摘できる。

表17～19に示した複数回受験者のデータは、千葉大生の英語力の推移を示している。複数回受験した175名のデータを平均すると192.5日で23.7点上昇していることがわかる。大学の英語教育に対する非難の意味で「大学に入ったら英語力は落ちる」と指摘されることがあるが、このデータで見ると限り英語力は向上していることがわかる。上昇の度合いが大きいかどうかの判断は比較の対象によって異なるが、本論文では一例として土肥(1995)が収集した企業等での一般的な英語研修の効果(TOEICを100点上げるために平均で223時間の研修が必要)と比較してみたい。千葉大1年次学生の英語授業は学部学科別のクラスが前後期とも90分週2回で15週開講されており、年間で90時間(1.5時間×2回×15週×2学期)学習するのが標準的である。実際には授業時間外の予習復習や自主的な学習もしているはずであるが、その反面で夏休み等の長期休暇の間に英語から離れてしまうというマイナス要因や、卒業単位数の関係で2年次以降では授業の履修時間が格段に少なくなるという傾向もある。また受験者によっては2回の受験の間の学習時間に相当な差があると考えられるが、そのような要因は175名ものデータの平均値を見ることによってかなり相殺できると考え、年間ひとり平均90時間学習しているという仮定で単純計算をしてみる。そうすると23.7点上昇させるために平均47.5時間(90時間×192.5/365日)の学習をしたことになる。100点上昇にかかる時間を計算すると、約200時間(47.5時間×100/23.7点)である。千葉大学は企業ほど英語教育に資金を投入していないし集中した英語特訓もしていないが、それでも同等の成果を挙げていると言える。なお、竹蓋他(2005)は千葉大学等で開発した三ラウンド・システムのCALL教材による英語学習の効率の良さを指摘しているが、CALLに限らず千葉大学内で開講されている400コマあまりの授業にはかなり内容の差があると指摘を受けることがある。今回の調査では受験者の履修した授業の履修履歴を調べることはできなかったが、今回のような全

体的な調査だけでなく、将来的により詳細な分析も必要だと考える。

さらに複数回受験者のデータを表 17～19 の 3 種の方法で分析してみると面白い結果がわかる。表 17 では受験回数別の得点上昇を示しているが、4 回以上の受験者は人数が少ないので別にすると、2 回受験するよりも 3 回受験した学生のほうが上昇していることがわかる。これは練習効果や学習期間の長さだけでなく、3 回も受ける熱意があるからそれにともなって英語学習にも真剣に取り組んだことや過去の 2 回の得点や上昇量を励みにして研鑽したことが大きいのではないかと考えている。また表 18 では、受験の間隔を考慮してもしなくても 1 年次から高学年になるほど上昇量が少なくなる傾向がうかがえる。前にも述べたように、1 年次で英語を多く学んでいる影響が表れている。表 19 の複数回受験者の初回得点別上昇量の集計を見ると、人数の少ない 200 点台、700 点台を別にすると、最初の点数が低いほどよく上がるという普遍的な傾向が確認できる。

一方で、600 点台の学生の英語力が下降してしまったという残念な結果（表 19）も出ている。英語力の高い学生は頭打ちになって力を伸ばしにくい傾向に加え、千葉大学の状況を考えると中上級者向けの英語授業が少ないことも大きく影響していると考えられる。また上でも指摘したように高得点者は試験によって単位が認定されてしまい、授業を履修しなくなってしまっていることも危惧している。TOEIC 等の外部試験は英語力を客観的に把握したり目標を設定したりするために重要な指標であり今後も受験を推奨するし、そのためには高得点による単位の取得という利点を設けることも悪いこととは言えないが、せっかく身につけた英語力のさらなる向上を放棄する結果になってしまわないような工夫も必要であると考えられる。

以上、推計も含めて今回の調査結果の解釈をしたが、はっきりとした傾向を把握するためにはより多くのデータが必要である。このようなテスト結果の収集は単なる実験台として学生を利用しているのではなく、本当に英語教育の成果を挙げるために必要なプロセスである。学生個人のためにも大学のためにも、少しでも有効にデータを活用すべきである。

2003 年度までの外国語センターにおけるさまざまな試みや実践の蓄積に加え、千葉大学の法人化と国際教育開発センターの発足後、本論文に書かなかったことも含めて筆者や他の英語教員は多くの努力をしてきた。しかし「英語が使える千葉大生」を養成できているかと問われれば、正規の長期留学や企業からの海外駐在に耐えられる英語力を持つ学生の割合は小さいと答えざるを得ない。千葉大学内に限らず、英語教育を批判されることは多いが、外国語としての英語を身につけることは決して簡単なことではない。主として普遍教育のレベルにおける英語教育について論じたが、本当の成果を挙げるためにはわずかな授業時間では不十分であり、また卒業単位を取得することだけが主目的となっているのでは動機付けが足りない。センターの英語教員は「英語 I」の授業用に自習教材を作成したり、CALL による学習の効率化や授業時間外の自習の環境整備をしたりするなどの工夫もしているが、学部や大学院における英語教育や学生の自主的な努力も不可欠である。大学という組織の中での制約のために英語教員にできることは限られているが、今後も厳しい環境の中でも高い目標を掲げ、英語教員がすべきことをして行きたいと考える。

謝辞

本論文の執筆にあたり、英語教務の遂行や調査のためにご指導とご協力をいただいた前センター長土屋俊先生、現センター長山内正平先生をはじめとするセンターの先生方、千葉大学英語教員の皆様、関係各部署の事務担当職員の皆様、学生の皆様、その他の千葉大学内外の多くの方々に感謝の意を表します。

主な参考文献

- 土肥充, 「英語聴解力育成用総合型 CAI のコースウェアの開発」, 千葉大学大学院自然科学研究科博士論文, 1995.
- 高知大学共通教育委員会, 「高知大学生の英語力を考える—TOEIC IP テストによる調査を踏まえて」, 2003.
- 国立大学法人千葉大学, 「国立大学法人千葉大学中期計画」, http://www.chiba-u.jp/general/about/announce/pdf/plan_2005.pdf, 2004/6/3.
- 国立大学法人千葉大学, 「平成 16 年度国立大学法人千葉大学年度計画」, http://www.chiba-u.jp/general/about/announce/pdf/plan_year_2004.pdf, 2005/2/1.
- 国立大学法人千葉大学, 「平成 17 年度国立大学法人千葉大学年度計画」, http://www.chiba-u.jp/general/about/announce/pdf/plan_year_2005.pdf, 2005/3/31.
- 国立大学法人千葉大学, 「平成 16 事業年度事業報告書」, <http://www.chiba-u.jp/general/about/announce/pdf/zaimu3.pdf>, 2005.
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課, 「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm, 2002/7/12.
- 竹蓋幸生他編, 『これからの大学英語教育』, 岩波書店, 2005.
- TOEIC 運営委員会, 「TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2004」, 2005.